

京都大学若手人材海外派遣事業 スーパージョン万プログラム
研究者派遣プログラム

成果報告書

提出日：平成 27 年 4 月 28 日

1. 渡航者			
氏名	寺尾 知可史	採択年度	平成 26 年
部局	医学研究科附属ゲノム 医学センター	電話	
職名	特定助教	メール	
研究課題名	大規模ゲノム関連解析データを用いた難治性免疫疾患病態解明と治療標的の同定		
海外渡航期間	平成 26 年 12 月 7 日～ 平成 27 年 3 月 31 日		
2. 渡航に関する情報			
渡航先	国名：アメリカ合衆国 大学等研究機関名：ハーバード大学 研究室名等：Departments of Genetics and Rheumatology 受入研究者名：Soumya Raychaudhuri		
渡航期間中の出張 (渡航期間中に一時帰国や学会参加等の目的で短期の出張があった場合、その目的、行き先、期間を報告して下さい。) ※複数回に渡る場合、適宜行を追加して下さい。	なし 出張先： 目的： 期間：		

3. ジョン万プログラムによる成果

以下の項目について、渡航期間中の成果、または今後見込まれる成果を具体的にお書き下さい。ページ数については増加してもかまいません。

<p>国際共著論文の執筆 (論文の題名、雑誌名、共著者名、刊行予定等)</p>	<p>Rheumatoid factor is associated with the distribution of hand joint destruction in rheumatoid arthritis. Arthritis and Rheumatol <u>Chikashi Terao</u>, Noriyuki Yamakawa, Koichiro Yano, Iris M. Markusse, Katsunori Ikari, Shinji Yoshida, Moritoshi Furu, Motomu Hashimoto, Hiromu Ito, Takao Fujii, Koichiro Ohmura, Kosaku Murakami, Meiko Takahashi, Masahide Hamaguchi, Atsuo Taniguchi, Shigeki Momohara, Soumya Raychaudhuri, Cornelia F. Allaart, Hisashi Yamanaka, Tsuneyo Mimori, Fumihiko Matsuda 投稿済み査読中</p> <p>また、本プログラムの課題を基にした論文を2報、筆頭著者兼責任著者として執筆予定</p>
<p>更なる外部資金獲得に繋がる国際共同研究の立上げ/実施 (国際共同研究の内容、実施計画、応募予定の外部研究資金等)</p>	<p>内容: 高安動脈炎と結核の遺伝的背景の比較 計画: 高安動脈炎は、若年女性に好発する大動脈及びその分枝を侵す自己免疫性血管炎である。その一方、結核の一病態ではないかとも考えられてきた歴史がある。それは、疫学的な分布において、高安動脈炎の発症の多い国・地域が結核もまた多く、実際に高安動脈炎患者において結核菌における反応性上昇が見られたという報告があること、動物実験においても結核菌抗原の注射によって高安動脈炎と似た症状を呈することなどによる。また、報告者が同定した高安動脈炎における感受性遺伝子である IL12B 領域の一塩基多型は、結核と同じく抗酸菌が原因であるらい病での関連が報告されており、両疾患の遺伝的な異同は興味深い点である。報告者はスーパージョン万プログラムにて滞在中に、結核感染データに関する全ゲノム関連解析(GWAS)を行ったイギリスのグループの一人と親交を得た。将来的に、両疾患の GWAS データを比較し、本問題における明確な答えを出す予定である。 外部研究資金: 未定</p>
<p>国際研究ネットワークの新規構築/深化 (参加した学会やその他の学術・交流組織、そこから構築/深化した研究ネットワークの内容等)</p>	<p>ハーバード大学は著名な研究者が多く、色々なセミナーが充実していた。研究室のある建物(New Research Building)内でのセミナーや発表会の他、遺伝解析に特化したブロード研究所でのセミナーがあり、そこで活発な人的交流が行われていた。報告者もまた、各セミナー等を通して、100万人規模のデータを用いて身長に関わる遺伝子を同定しているグループのトップや、遺伝子変異がタンパクに与える影響を評価するプログラムを作成した研究者や、ハーバード大学附属ブリガムアンドウィミズ病院のリウマチ部門の責任者と言った様々な研究者と交流を持つことが出来た。この人的ネットワークを通して、将来的な共同研究へとつながることが期待される。</p>

<p>在外研究経験 による研鑽</p> <p>(渡航先機関で得た 研究の展開方法、研究 室の運営方法、教育方 針・人材育成方法等)</p>	<p>渡航先の研究室は実に国際的で、数代に渡るアメリカ人は一人のみであった。国際色豊かなメンバーが活発に議論を戦わせており、グループミーティングやラボミーティング、またはジャーナルクラブの具体的なマネージメントなど、勉強になることが多かった。</p> <p>また、新規メンバーの選定に関わる機会を得ることが出来た。日本では、ラボのトップとの面接等によって決まることが多いが、渡航先の研究室では、ほぼ全員のメンバーとの面接を経て、意見を集約して決定していた。この意思決定プロセスは、実務者の意見が反映されるという点において、大いに参考にすべきものと思われた。</p> <p>また、ブロード研究所において毎週行われるセミナーでは、各研究室が持ち回りで最新の知見を発表しており、その人材の層の厚さに驚くと共に、充実した卒後教育が人材育成においても大きな意味を持つものであるということを認識できた。</p>
<p>フィールド研究 の進展</p> <p>(渡航先国で実施した 実地調査や文献調査 等の内容)</p>	<p>本課題ではフィールド研究は行っていない。</p>